

謝辞

「森田君、来週までに何か30枚書いてきて」。片岡暁夫先生のこの一言で、私の博士課程生活が始まりました。それからはとにかく本を読み、ほぼ毎週何か30枚書いて提出しました。今では自分でも読み返すのが恥ずかしい文章ですが、片岡先生は温かく見守ってくださいました。ただし、深く考えずに他人の意見に同意した場合には、口調は温厚でしたが厳しい指摘をいただきました。私が考えた中で、この領域において独自で有意義な点があると、片岡先生はそれを発展させるような指導をしてくださいました。こうして完成したのが本論文です。片岡先生に心から感謝申し上げます。

高橋健夫先生は、片岡先生より主査を引き継いでくださり、ことあるごとに叱咤激励していただきました。心から感謝申し上げます。

佐藤臣彦先生には、学群時代から豊富な哲学的知識に基づく指導をしていただきました。哲学の専門家から直接指導いただけたことは私にとってとても幸運でした。心から感謝申し上げます。

副査をしていただいた大高泉先生、阿部生雄先生、清水諭先生には、幅広い視野からのご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。

同じく副査をしていただいたスポーツ倫理学者の第一人者である近藤良享先生は、本論文提出間際まで、事細かい指導をしていただきました。今回は、倫理学上の立場としては近藤先生と反対の主張をしましたが、片岡先生同様、寛大な心で見守ってくださり、異なる立場からも指導をしていただきました。私がスポーツ倫理学を主専攻とした学群生以来、近藤先生との議論が私の学問上の基礎をなしています。心より感謝申し上げます。

また、体育哲学研究室の学生諸氏、ならびに準研究員の石垣健二氏にもお礼を申し上げます。特に先輩に当たる関根正美氏、深澤浩洋氏、鈴木康史氏にお礼申し上げます。関根、深澤両氏は、冒頭の拙い文章に対して事細かい指導をしてくださいました。博士論文はどのように書けばよいのか、そして現在何が問題か、両氏の指摘に解答していくことにより、私の博士論文の基礎はできあがったと言えます。鈴木氏は一学年先輩ですが、氏のバイタリティ溢れる研究姿勢に触発され、氏を手本とし、論文執筆に向かうことができました。また他の研究室の皆様にも感謝申し上げます。

最後になりましたが、私の家族にも感謝します。この道を歩むことを奨励、激励、支援してくれた両親に感謝します。特に父には領域は違いますが研究者として多くの指導をいただきました。研究の支えとなってくれた妻裕美子にも感謝します。そして来月一歳になる長女李璀璨子にもお礼を言わねばなりません。彼女が将来にわたって、生存に関する心配をせずに、なんらかのスポーツを楽しんでほしいとの願い以上に、私を研究に駆り立てるものはなかったでしょう。途中で挫折したり中断せずに、一日も早く論文を提出したいと思ったのも彼女のおかげです。彼女はすでに十分親孝行してくれました。

こうした多くの方々のご指導、ご協力にもかかわらず、本論文はすべての方々の期待に十分答えるものではありません。しかしその責任はすべて私にあります。博士論文を今後の研究の出発点に位置づけ、絶えず研究成果を公表し続けることがご指導いただいた方々への恩返しになると想っています。

平成11年2月

森田 啓